

検査Ⅰ

時間 四十五分

受検上の注意

1. 解答用紙に、受検番号・氏名を記入してください。
2. 声を出して読むはいけません。
3. 解答は、解答用紙の所定のところに記入してください。
方法を誤ると得点になりません。
4. 検査終了後、解答用紙を回収します。

1 次の**文章1**と**文章2**を読んで、あとの問題に答えなさい。
(※印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。)

文章1

私が東京都心に暮らすカワセミの存在に気づいたのは、コロナ禍^か2年目の2021年春のことである。

2020年初春から始まったコロナパンニックの最初の1年は、自宅の近所の自然に注意を向ける時間も力もなかった。ライフスタイルとワークスタイルを変えるのに精一杯^{せいいつぱい}だった。大学の授業をZoomとYouTubeを使った動画^{ちゅうが}中継^{ちゅうけい}に切り替^かえた。実家では父親が病に倒^{たお}れ、介護^{かいご}に頭を悩^{なや}ませることになった。自宅にこもりきりになったので、本を1冊書き上げた。ほとんど外を出歩かない1年が過ぎた。

東京のカワセミに出会ったのは、コロナ禍^かに突入^{とつにゅう}して1年あまりたった2021年5月2日。ゴールデンウィークの真^{ただ}っ只^{ただ}中^{ただ}のことである。2021年も、すべての授業はZoomによるリモート講義。大学に行っても学生たちには会えない。旅行もできない。帰省^{きせい}も難しい。ましてや老人ホームに入所した父親に会うこともできない。それでも1年たって、近所を散歩する余裕^{よゆう}ができた。カワセミに出会ったのはちょうどそんなタイミングだった。

東京のカワセミに遭遇^{そうぐう}した2週間後の5月20日。父親の容態が急変し、亡くなった。実家に車で向かい、死んだ

父親とは自宅の和室で対面した。最後に生きている父親に会ったのは前年2020年9月4日。病院から老人ホームに移動する直前、病院の廊下^{ろうか}でたった10分間だった。

父親の死去に伴^{ともな}い、帰郷^{ききょう}した翌日朝、実家の近所の川沿いを散歩していた。

「ちい」

聴き慣れた声が。カワセミだ。上流へ飛んでいく。実家の近所でカワセミを見るのはじめてだった。

おそらくそれまでもカワセミは、近所にいた。東京でも実家の近所でも。ただ気がつかなかったのだ。なぜ、私はカワセミに気づかなかったのだろう。

それは、私自身の「環世界^{かんせかい}」に東京のカワセミが暮らしてなかったからだ。

「環世界」とは、生物学者ヤーコプ・フォン・ユクスキュル^{ユル}が唱^{とな}えた概念^{がいねん}である。

あらゆる生物に客観的世界は存在しない。それぞれの生物固有のセンサーII感覚器がとらえる空間と時間のみが、それぞれの生物の主観的な世界である。ユクスキュルはそう定義した。そんな個々の生物の主観的な世界を「環世界」と名付けた。

くわしくは『生物から見た世界』（岩波文庫）を読んでほしい。ユクスキュルはマダニの環世界の話をする。哺乳類^{ほにゅうるい}の血を吸うマダニには視覚も聴覚もない。つまり光にも音

にも反応しない。その代わりマダニはたった2つの情報に鋭敏に反応する。

*酪酸の匂いとある域の温度だ。

マダニは木の上の枝などに陣取り、哺乳類が下を通るのをひたすら待つ。延々待つ。反応するのは、哺乳類が発散する酪酸の匂い、そして30度台後半の温度つまり哺乳類の体温だけだ。この2つの情報をマダニが感知すると、ぽとりと枝から落ち、運が良ければ哺乳類の背中に到達し、血を吸う。

〈中略〉

さらに人間の場合、生き物としての「環世界」だけでなく、自身の経験に基づく、ごく個人的な「環世界」の中でも暮らしている。この環世界はユクスキュルが定義した「感覚器で知覚できる世界」とは、ちよつと違う。個々人が後天的に獲得した言語と知識と経験と好みがつくり出す大脳皮質がつくった「文化的な環世界」である。

友達や恋人や夫婦や親子で、街を散歩したり旅行したりしたときに、(あれ、この人、おんなじところにいるのに、全然別の世界にいる)と思ったこと、ないだろうか？

片方が道ゆく自動車の種類にやたらと反応するのに、もう片方は街を歩く人たちのファッションばかりが気になっている。片方が道端の草についていってしまふのに、もう片方は街角の看板ばかりを見ていたりする。

まさにお互いの後天的な「環世界」が異なっているのが表出した状況だ。結果、ときどき喧嘩になったりする。

「なんでさっきの××に気がつかないの！」

××に気づかないのは、その××がその人の環世界に存在しないからだ。自分の環世界に存在しないものを、人は気づくことができない。

私の場合、2021年の春まで「東京のカワセミ」が自分の環世界に存在しない××だった。

私の環世界に「カワセミ」がいなかったわけではない。

自然は大好きだし、生き物も大好きだ。自分がここは自然だと思っている場所では、カワセミにちゃんと反応し、見つけている。*小綱代でも*鶴見川でも何度もカワセミと出会っている。

私の環世界に存在しなかったのは、「カワセミ」という一般名称ではない。「東京のカワセミ」という個別具体的な存在である。

私だけではないかもしれない。多くの人が、自分の環世界に「東京の自然」を内包していないかもしれない。東京は人工空間だ、だから大した自然などない、という思い込みがある。すると、目の前にカワセミが出てきても気づかない。なぜならば、カワセミは清流の鳥という思い込みがあるからだ。

〈中略〉

しかし東京のカワセミは、コンクリートで固められた東京都心の人工的な川に暮らし、主に外来生物を餌にして、
*水抜き穴に巣穴をつくり、子育てをしている。

私が勝手にイメージしていた*メディア上のカワセミの「環世界」と、実際に東京に生きるカワセミの「環世界」には、かなりずれがあった。だから見えなかった。

(柳瀬博一「カワセミ都市トキョー」『幻の鳥』はなぜ高級住宅街で暮らすのか)より)

〔注〕

概念……物事のだいたいの意味や考え方。

酪酸……有機酸の一つ。不快臭のある液体。

後天的……生まれてから後に身につけるさまのこと。

小網代……神奈川県三浦市にある自然豊かな森。

鶴見川……東京都および神奈川県を流れる川。

水抜き穴……敷地内の土にしみ込んだ雨水を抜くために、壁にあけた穴のこと。

メディア……情報のやり取りをする手段や情報を伝える媒体、媒介するものこと。

文章2

——例えば村上さんは、『若い読者のための短編小説案内』の中で、読書をしてらっしゃいますよね。そして個々の作品の構造を指摘し、鮮やかな読みを展開されていました。あれは読者にとっても、すごく意味があることなんですよ。多分村上さんにとっても。

「この小説はこうだ」とか、正解を言うみたいな表現は避けて、こういうふうにも読める、という言い方を常にされていた。次に読むときはわからない、という柔軟性の上に立って「あくまで僕はこう読んだ」と慎重に表現されていました。本の中でおっしゃっていたように、あそこでなされていたことは批評や評論ではないかもしれない。でも、ひとつの*テキストの可能性を示す行為という点では、かけ離れたものではないと思う。でも、村上さんはときどき、そういうものは必要ないんだって立場をおとりになりますよね。

村上 僕が『短編小説案内』でやっているのは、結局のところひとつの「芸」みたいなものですね。こういう本を読んで、たとえばこういう読み方ができるというのを文章的に……。

——披露している。

村上 そう。披露している。だから、それは評論というよりは、何というのかな、むしろ文章芸に近い。テキストを

土台にして、僕自身のあり方を語っているということになると思います。

——じゃあ、あそこで書いていらっしゃるものは、ご自身の中では文章ということになりますか。

村上 あくまで僕の文章がメインです。小説を読むという行為を文章化する。どこまで文章化できるかを確かめる。

——評論ではなく、文章を書いている。

村上 うん。だから、僕はあそこで何ひとつ結論を出していませんよね。「こういう読み方もあるし、僕はこう読んだけど、こう読んでも面白いよ」みたいなことを言って、それは批評とか評論とかいうよりは、一種の語りなんだよね。

——たぶん、多くの評論家や批評家も、それとは無縁じゃないと思うんですよね。構造の指摘にしろ、テーマの指摘にしろ、自分だったらかう読めるということのある種の置き換えで、基本的には技術の披露であるという認識があると思うんですが。

村上 でも、小説家が何かそういうものを書くのと、評論家が評論するのでは、どうしても話がちょっと違ってきますよね。

——違う感じがしますか。

村上 要するに僕がこの『短編小説案内』でやろうとしているのは、「物の見方」のひとつの*サンプルを示すことな

んです。小説を読むときには、こういう読み方もある、こういう読み方もある、そういう複数の視点を示しているだけであって、小説はこう読めとか、これはこういう意味なんだとか言ってるんじゃない。この本はもともとはアメリカの大学での*講義録をベースにしています。つまり僕はこのようにこの作品を読んで、こう思うんだけど、君たちの意見を聞かせてくれないかな、という*呼び水に近いものです。実際にはあそこから²みんなでわいわいとにぎやかな討議が始まるわけ。それはなかなか面白かったですけどね。アメリカの大学のクラスって活発だから。でもとにかく評論じゃないな。本を読むことに僕が求めているのは、「なんとか*イズム」みたいな理論武装を取っ^{ばら}払った自由さだから。

——もちろん批評も、読書の自由が前提にあって成立可能なものなんだけれど、村上さんがおっしゃる自由さというのは、目的としての自由さというか、成り立ちにおける自由さ、ということですね。

(川上未映子^{かわかみえこ}／村上春樹^{むらかみはるき} 「みみずくは黄昏に飛びたつ 川上未映子訊く／村上春樹語る」による)

〔注〕

テキスト……書物などの本文。または、文章の言い回しや表現のこと。

サンプル……本文では、実際の例のこと。

講義録……講義の内容を記録した書物のこと。

呼び水……本文では、ある物事を引き起こすきっかけのこと。

イズム……本文では、しっかりした根拠に基づく考えや主義のこと。

〔問題1〕

¹ 私自身の「環世界」に東京のカワセミが暮らしてなかったとありますが、これはどういうことですか。
文章1の言葉を使い、六十字以内で説明しなさい。

〔問題2〕

² みんなでわいわいとにぎやかな討議が始まる
とあり、筆者はそれを「面白かった」と述べています。筆者がそのように感じる事ができる理由を、解答らんに合うように**文章1**の中から二十字で抜き出しなさい。

〔問題3〕

あなたは、これからの学校生活の仲間とどのような姿勢で接していきたいと考えますか。あなたの考えを四百字以上四百四十字以内で書きなさい。ただし、次の条件と下の「**きまり**」にしたがうこと。

条件

①

文章1・**文章2**の共通する内容を示すこと。

②

段落分けについては、内容に応じて適切に行うこと。

〔きまり〕

○ 題名は書きません。

○ 最初の行から書き始めます。

○ 各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○ 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。

○ 「や、や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますめに書きます。（まずめの下に書いてもかまいません。）

○ 「と」が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、「」で一字と数えます。

○ 段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。

○ 最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。

検査 I 解答用紙

受 検 番 号

氏 名

--

1

※のらんは記入しないこと

問題 1

〔問題 2〕

から
○

〔問題 3〕

[illegible]

440

400

300

200

100

20

60

20